

# 太陽と土に戯れる

大阪大学大学院工学研究科  
マテリアル生産科学専攻教授

藤原 康文

～ 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の  
衣ほすてふ 天の香具山 ～

あの小倉百人一首の第2番目に出てくる持統天皇の歌である。その歌に詠まれている天の香具山（今は、香久山と書かれる）の麓で生を受け、大阪大学を卒業するまでの22年間を暮らした。藤原宮跡から大和三山への眺望の保全と周辺の田園景観の調和を目的に、あたり一帯が風致地区に指定されていることもあり、野生のキジが生息するほど自然が豊富で、ガキ大将であった私にとって最高の遊び場であった。

小学生の頃、ランドセルをこっそり家の玄関へ置き、日がどっぷり暮れるまで遊び惚けた鎮守の森が古事記に出てくる畝尾都多本神社であり、藤原京におられた天皇に捧げる水を汲んだ井戸がご神体であることを遙か後で知った。また、少年時代、香久山へ竹を切りに行き、弓矢を作り、如何にして遠くへ、如何にして正確に飛ばすかを競い合ったのが今となっては良い思い出であり、それが工学を志すきっかけの一つになった。

大学院（基礎工学研究科）に進学した後は実家を離れて石橋駅近くに下宿をし、その後、人生の転機に応じていろいろな所へ移り住んだが、今から考えると住まいの近くには常に公園やグラウンドがあった。根っからの田舎育ち故、燦々と照りつける太陽の下で土の香りを嗅ぎ、身体を動かすことが大好きである。そのため、6年前に工学研究科へ着任したのを機に、通勤に比較的便利で、自然が豊かな奈良の田舎に住むことにし、週末は「野菜作り」と「ソフトボール」に明け暮れている。

昨今、食の安全が新聞やテレビで話題になることが多い。たまたま実家の畑が空いていたので、その有効活用を口実に野菜作りを始めた。もともと実家が兼業農家であり、基本的な農機具は一通り揃っていることもあり、最近では家庭菜園の域を超え、200坪近い畑

を一人で切り盛りしている。作る野菜は多種多様で、自給自足を目指している。この連休にも、きゅうり、なすび、トマト、ピーマン、ししとう、枝豆、ごうや、おくら、かぼちゃ、すいか、プリンスメロン、さつまいも、里芋の植え付けを済ませ、それらの順調な成長に目を細めている。また、本格的な梅雨入りを前にしてジャガイモ、たまねぎ、ニンニクの収穫が迫っている。冬には、白菜、キャベツ、ホウレンソウ、菊菜、ニラ、太ネギ、大根、カブ、ブロッコリ、カリフラワーを植え、鍋の季節には重宝されている。

野菜作りは「タイミングと加減」が大切で、大学での教育と同様に奥が深いと痛感している。鍵を握る土作りは冬場からせつせと始めるが、近くのお年寄りがつくる見事な野菜にはとても及ばない。機会を見つけて彼らに教えを請うが、経験がものを言う世界。なかなか科学出来ず、そこを何とかしたいと日々、奮闘している。

ソフトボールも楽しみの一つである。学生時代、研究そっちのけで練習し、研究室対抗ソフトボール大会で学部優勝を勝ち取ったのが「昔取った杵柄」となっている。現在、気の合う仲間とチームを作り、地元リーグ(全7チーム)に参加している。公式試合は年間、リーグ戦が12試合、地区大会が4試合の計16試合あり、リーグに所属する大抵のピッチャーは本格的なウインドミル投法である。元社会人野球や元社会人ソフトボールの選手を抱えている贅沢なチームもある。ちなみに、昨年の私の通算打率は3割8分5厘であり、守備はレフトかライトに入ることが多い。通常、日曜日の朝7時に近くのグラウンドに集まり、練習やリーグ戦を行う。チームメイトには銀行マンや証券マン、電車の運転士等、いろいろな職種の方がおられ、普段では耳にすることが出来ない業界話を聞くのも楽しみの一つである。また、我々のリーグには60才以上の方だけで構成されているシニアチームがあるが、その豪快



趣味が高じた家庭菜園。近くに香久山を臨む。

なバッティングと軽快な守備には常々驚かされる。食生活の向上や医療技術の発展により今日の長寿社会を迎えているが、健康な身体で老後を迎える楽しさを再認識させられる。

太陽と土に戯れたくて始めた「野菜作り」と「ソフトボール」であるが、最近は仕事に追われて週末に自室に籠もることが増え、そのバランスに苦慮している。いつかはそれら趣味を科学的に理解し、極めたいと考えている今日この頃である。

(学界)

## 辻 伸泰 准教授（知能・機能創成工学専攻） 第5回日本学術振興会賞を受賞

大学院工学研究科の辻准教授（現・京都大学大学院工学研究科教授）が、第5回日本学術振興会賞を受賞し、授賞式が3月9日に日本学士院で挙行されました（<http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/>）。受賞対象は「超微細粒金属材料に関する研究」であり、大阪大学在籍時に行なった、結晶粒径 $1\mu\text{m}$ 以下の超微細粒組織を有するバルク多結晶金属材料の製造方法の開発、組織形成過程の解明と、その興味深い力学特性の発見に関する研究成果が評価されました。なおこれらの研究の多くは、グローバルCOEプログラム「構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点」（拠点代表者・掛下知行教授）の枠組みの中で行なわれました。

日本学術振興会賞は、我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルにおいて発展させるために、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を早い段階から顕彰し、その研究意欲を高め研究の発展を支援していくことを目的として、平成16年度に創設されました。審査委員長の江崎玲於奈博士をはじめ、ノーベル賞受賞者を含む我が国トップレベルの科学者からなる審査委員会で厳密に審査が行なわれ、今回は人文社会系、理工系、生物系分野の計374名の候補者の中から、24名が受賞しました。大阪大学からは、第4回までに計2名（工学研究科からは1名）の受賞者が出ています。授賞式とその後の記念パーティーには、秋篠宮ご夫妻も列席され、受賞者たちと和やかな歓談が行なわれました。



受賞者記念撮影